

孫文と張作霖

—— 民國再統一に向けての提携を中心に ——

澁 谷 由 里

はじめに

第一章 敵對者、復辟派、秩序破壊者としての張作霖

第二章 親日派、「奉天軍閥」

第三章 提携關係構築とその意義

おわりに

はじめに

中華民國の前半史については、割據する「軍閥」^①間の抗争と、これを終結させようとする北伐とを對比させるのが、な
がらく敘述の定石であった。國民政府成立を、民國中期における一つのピークと考えると、その要因と過程としての北伐
を描くのも合理的ではある。とはいうもののこの歴史觀にたつ限り、それまで「當局」であった北京政府の統治方針や、
方針決定に關與した有力者たちの具體像などは檢證しにくくなり、國民政府との比較も難しくなってしまう。

もし上記兩政府間に完全な斷絶があつたとしたら、人脈も斷絶したはずである。しかし例えば、一九二六～二七年に北

京で代理内閣を組閣した顧維鈞は、三二年から國民政府の外交を擔つた⁽²⁾。また張學良が二九年に國民政府に合流（易幟）し、三一年の滿洲事變勃發まで、東北の實質的支配を任されたことはよく知られている。むろん舊來の敵對者を全員斷罪してしまつては、蔣介石も統治が困難だったことは事實であるが、上記のような登用や合流は、一朝一夕では、また軍勢力で相手を壓倒するだけでは不可能である。全國政權としての國民政府にとっては、北京政府側との交渉で蓄積した政治経験や、収集した内部情報と形成した人脈が、二八年以後の統治には特に有益であつたと考えられる。

第一次世界大戦後から二五年にかけての、孫文と北京側の有力者たちによる南北融和は、直接には民國再統一に結びつかなかつたが、のちの國民政府にとって、敵對者との關係構築を圖るうえでスタートラインとなる経験だつたであろう。しかし孫文から北京側への働きかけについては、革命史の文脈に合わないものとして、かつては全否定的な評價が下され、事實上、研究對象から外されてきた。近年は、従來の革命像から外れる史實であつても、包括的に理解しようとする機運が高まつたためもあり、孫文の思想と政治行動とを分別した研究が日本側で蓄積され、孫文研究を専門としない立場からも、孫文にアプローチしやすい状況になつてゐる。

また中國側の實證研究も進んで、新たな視點が提案されている。例えば習五一は、國民黨改組以前の孫文にとって、張作霖からの支援は、特に福建省に軍事的據點を形成する上で重要だつたと指摘した⁽⁶⁾。孫文・張作霖關係で複数の論文を發表している劉貴福は、内外の情勢變化に應じて、兩者の關係に高揚期と低迷期があり、相互に感じていた利用價值も、その時々で異なることを明らかにした。さらに邱捷は、孫文とヨッフエとの交渉過程を検討して、張作霖との關係によつて孫文がソ聯側に壓力をかけ、ソ聯軍の南下を牽制しようとしたと述べている⁽⁸⁾。また王光遠によると、陳獨秀や李大釗が、孫文との合作を當初ためらつた一因は、張作霖との關係にあつたが、國民黨の軍事行動擴大のためにはやむをえなかつたとして、のちにはその必要性を理解したといふ⁽⁹⁾。

本稿ではこれらの蓄積・進展を繼承したうえで、筆者が従來とりくんできた、張作霖研究の内容を加味して、南北融和

にいたる過程の、初期段階までを解明することにした。

具體的には、孫文の北京に對する最初の融和メッセージ、二三年一月二六日附の通稱「和平統一宣言」¹⁰（以下、「和平」と略）發出までの、張作霖との提携關係構築過程を扱う。孫文が内外に、北京との融和をはじめて公言したという點で「和平」の意義は大きく、張作霖は呼びかけの主要対象者だったからである。よつて孫文が張作霖を最初に認知したと思われる一九一一年から、二三年「和平」までの彼らの關係を軸にして、孫文の張作霖評價、および兩者の關係構築に寄與した人脈と情報網の概要についてあきらかにしたい。

第一章 敵對者、復辟黨、秩序破壊者としての張作霖

孫文が張作霖を最初に認識したのは、辛亥革命の彈壓者・敵對者としてであった。『國父全集』には、一九一一年二月、當時の東三省總督・趙爾巽の命により、奉天における革命の同志たち（聯合急進會員・柳大年ほか）を、張が逮捕した旨が記されている。

翌年二月一七日における、清朝皇帝退位後の拘留は不當であるとして、孫文は袁世凱を通じて二月一八日附で趙爾巽に抗議した。その結果、彼らは釋放されたという。¹²しかしこれはあくまでも、王朝終焉後における革命運動家拘留の不當性を訴えただけである。張作霖個人の罪狀を訴えたものではない。例えば、奉天における革命運動の中心であった張榕の暗殺事件（二二年一月三日）は、實行犯が張作霖の部下であったことが現在では判明しているが、當時その真相について、孫文が追及した形跡はない。

以後、張作霖についての孫文による言及は、一八年に至るまであらわれない。¹⁴しかしその間、一七年五月に國會を解散させ七月に「復辟」を強行した張勳の事件は、共和制の否定として、袁世凱の帝政運動（二五―一六年）と同様かそれ以上の衝撃を孫文に與えた。張勳は段祺瑞に敗れたが國會は回復されず、代理大總統に就任した馮國璋にも實權はなかった。

孫文は、廣東・廣西・湖南・雲南・貴州・四川の「西南六省」に、臨時政府樹立と臨時大總統選出を呼びかけた。その結果、北京政府に對抗して九月に廣州で開催された國會非常會議は、孫文を「中華民國軍政府海陸軍大元帥」に選出した。だが革命勢力のみならず、北京政府の元閣僚や各種軍事勢力の寄せ集めであった廣州（軍）政府では、發足當初から構成員相互の牽制が目立った。一八年二月二日には、廣州政府への参加を拒否した諸勢力が、大元帥制を總裁合議制に變えることを孫文に認めさせ、孫文は窮地に陥っていた。¹⁵これに追い打ちをかけたのが、張作霖「南征」の動きである。

袁世凱の死去（一六年）以後、北京では段祺瑞（安徽）・馮國璋（直隸）兩派の争いが續いており、その他の勢力を自派にとりこむ工作が盛んであった。段派・徐樹錚の懷柔工作により、張は、馮が日本から購入して秦皇島に配備した武器を強奪し、自軍の強化に充てていた。もし張が入關して段の武力統一政策を支持するならば、大總統選出の際に張を副總統として擁立する密約も、二月に徐と結んだ。¹⁶いっぽう孫文は、上述のように第三極を形成して北京の混亂に乗じようとしたが、馮派に接近する軍事勢力を統御できず、「西南六省」内の平定に追われるかたわら、當時は彼が動かせる唯一の武力であった陳炯明軍のために、福建省へも地盤を擴大しようとしていた。¹⁷そのさなか孫文は、「秦皇島を出發した六〇〇名の張軍が、福建省まで南下してくる」、さらに、「船があれば一六〇名もの兵がただちに」張軍の先發隊に加えて福建省に「送られてくる」との報告を受けている。¹⁸

張はそれまで、孫文に直接の危害を加える存在ではなかった。ところが段派と組んで急速に擡頭し、孫文が據ろうとする第三極を切り崩す敵對者となったのである。しかもそれだけではなく、張が北京・奉天の復辟派と共謀して、共和制顛覆の舉に出るかもしれない、という恐れを孫文は抱いていた。¹⁹張作霖は辛亥革命時に革命派を彈壓し、宗社黨を默認し張勳と姻戚關係にあつたので、孫文の懸念にももつともなところがある。

さらに孫文の張作霖評價は、彼を「叛督」（叛亂を起こしている督軍）と認定するにおよぶ。復辟失敗により、一七年七月に安徽督軍を免職された張勳の後任・倪嗣冲とともに、「それぞれが勝手に行動して」、「兵權を盗んでもてあそんでい

る」⁽²⁰⁾と斷じ、彼らを制裁できない國務總理・段祺瑞の無能ぶりとあわせて批判しているのである。

このように一二年から一八年までの張作霖は、孫文にとって、東北における革命の彈壓者からはじまり、自身の軍事的地盤を脅かす敵對者、さらには共和制を脅かす復辟派、北京政權の統御に従わない秩序破壊者として認識される存在であった。この段階では兩者提携の餘地はまったくないが、孫文にとって遠い存在であった張作霖が、自身の利害に迫る存在へと變化し、その動向や人物像を無視できなくなっていく状況がうかがえる。

第二章 親日派、「奉天軍閥」

一八年一月の第一次世界大戦終結は、北京政府と孫文にも大きな影響を與えた。戦勝國として、民國が國際會議に臨む必要が出てきたからである。南北の政府は別々に宣戦布告して參戰していたが、政府が分裂したままでは統一國家とみなされず、國際的な發言權も弱いので、國內での和議をまずは成立させなければならない。

一八年五月に廣州政府の「大元帥」を辭任した孫文に代わって、同政府の軍事的實權を掌握した廣西省の軍事勢力（いわゆる「桂系」）は、馮派との和平による南北和議を摸索した。馮派も段派に對抗し、また孫文を壓迫するうえで、「桂系」と結託することにはメリットを感じ、これに應じた。しかし、そもそも廣州政府を出て福建省に新たな活路を切り開こうとしていた孫文は、馮派と「桂系」の結託による南北和議が成立し、彼を排除する形で統一政府が樹立されれば自身の存在意義が消滅するので、この形での和議には反對した。さらには兩者聯合の壓力を輕減するためにも、馮派の政敵である段派との同盟を、また段派・馮派とならぶ北方の大勢力である張（作霖）派との同盟を圖り、軍事的に對抗する道を探らなければならなくなった。ソ聯やコミンテルンからの支援が充分に受けられなかったころの孫文にとって、段派・張派との同盟の成否は、まさしく死活問題だったのである。⁽²¹⁾なおこのように國內各勢力の思惑が交錯する中で、一九年二月二〇日から開催された和平會議は、妥協點を見いだせずに五月一三日に決裂した。⁽²²⁾

これと前後して、北京から全國に廣がったのが五四運動である。七月には廣州でもこれに呼應した運動があったが、「桂系」の督軍に彈壓された。孫文は抗議して軍政府廢止を訴え、一九一四年結成の中華革命黨にかわり、一〇月一〇日に「中國國民黨」を發足させるに至る。

いっぽう段祺瑞は、張勳の「復辟」を鎮壓したあと國務總理に復職し、一七年七月に黎元洪大總統を辭職に追い込んだ。彼は、後任の馮國璋のもとでも一一月までは總理職にあった（二月から大戰參戰のために新設された、大總統直屬の「參戰督辦」に就任）。しかし袁世凱の後継争いをしてきた兩者の關係は、つねに緊張していた。馮は一八年二月に、衆參兩院の議員數を大幅に減らす新しい議會法を公布し、大總統が統制しやすい議會の創出を圖つたが、三月に國務總理に復歸した段の一派は、これに對抗して安福俱樂部という政黨を組織し、六月の選舉で大勝した。段派に議會を掌握された馮は、同年一〇月に下野し、一二月に死去した。⁽²³⁾馮の下野後に、議會による選出で大總統に就任した徐世昌は、段を國務總理からは解任したが、參戰督辦にはとどめたので、北京政府の實權は事實上、段にあったとみてよい。なお一九年七月に參戰督辦も解任されると、段は同月に大總統直屬の邊防督辦に就任した。以上、段の經歷をみると、地位も權力も空洞化する大總統や國務總理に代わり、「參戰」「邊防」の名のもとに、「國軍」を形成しうる強權を摸索していた様子⁽²⁴⁾がうかがえる。

かたや馮國璋下野・死去後の彼の派閥は、直隸督軍であつた曹錕と、その部下・吳佩孚に繼承された。曹・吳は、段の政治手法に當然反撥していた。國軍形成と民國統一は表裏一體の關係にあるので、その意味では段も、曹・吳との對立に決着をつけ、南北を融和させなければならなかつた。

二〇年に入ると、曹・吳と段との對立はいっそう深まつた。いっぽう孫文も、曹・吳と近い「桂系」の軍人たちからますます排除されて、廣州に戻れないという事態に陥つていた。ここに段と孫文とが接近する契機が生まれた。

民國九（一九二〇）年六月二十九日附で孫文が田中義一に宛てた書簡⁽²⁵⁾では、段への評價はきわめて高い。いわく、段は「武力主義が世界や國民に受け入れられないことに鑑みて、昔日の非を翻然と悔悟し、「國」民黨と協調し、兵禍をやめ民

治を興したいと願うようになった」。これとは對照的に、當時は段から離れて曹・吳に近づきつつあった張作霖に對しては容赦ない。彼の突然の上京は、「段氏と「國」民黨との講和を阻み、また復辟の陰謀と關係がある」と疑い、張勳上京後の「變局」(復辟事件)に通ずるものとして警戒している。この段階ではまだ、復辟派としての張のイメージが、孫文に強く残っていることがわかる。

ただし孫文の張への認識は、確實に深まっていた。書簡の續きで、張は「もともと一介の馬賊」(原文では「鬍匪」)であるが、今日の地位を得られたのは全く日本との提携による」とし、日本の元閣僚の言をひいて、「張は日本政府の寒賈計だ」と述べ、彼の「全ての行動は、日本政府の鼻息をうかがわないとできないからだ」と斷じている。上京も、「日本の指圖によるものではないにしても、必ずや日本の同意するところとなっている」はずだといひ、「段祺瑞を支援して中國の平和を破ろうとしたことから、張をそそのかして中國の平和を破ろうとすることへと「日本は」變わったのだ」と非難する。張の經歷、およびその背後にある日本との密接な關係について、孫文が情報収集に努めた形跡がうかがえる。やがて安直戦争へと事態が急轉していくなかで、曹・吳・張對段・孫文の圖式が、孫文自身のなかでつくられつつあり、かつ張が北京政府をうかがう有力者に擡頭してきた要因を、日本の支援に求めている。ちなみにこの田中宛書簡の影響か(少なくとも孫文はそう考えていた)、張は安直戦争勃發の七月には、奉天の日本總領事(赤塚正助)に呼ばれて奉天に戻った。戦争そのものは、月末までには曹・吳軍の勝利で決着した。⁽²⁷⁾

二〇年八月五日、孫文は上海におけるアメリカ議員團訪中歡迎會の席上で、同じく上海で開催された、前年二〜五月の南北中國政府間の和平會議に言及した。⁽²⁸⁾一九年のこの期間について、「日本の軍閥は中國を征服する計劃、すなわち中國の軍閥を利用して、中國を征服しようという計劃をもっていた」と彼は指摘し、はじめて明確に、日本と中國の雙方に、専横的な有力軍人とその派閥を惡とみなす「軍閥」概念を用いた。なお以前には高く評價していた段祺瑞を「北京軍閥の頭目」、張作霖を「奉天軍閥の頭目」とし、ともに日本が作り出した「軍閥の頭目」だとも述べている。一九年時點で張

は「すでに三〇萬の兵を保有」、段「所管の兵は約一〇萬」とも孫文は認識しており、同じ親日派でも、段祺瑞より三倍も上回る大軍を、張作霖が擁していると考えていたことがわかる。また段への接近を圖つたのは南北和議のためだけでなく、「日本が訓練した邊防軍を使って日本を攻めるとの私の計劃」があつたためだとも告白し、しかしそれは「段氏の敗北後、消滅してしまつた」とも述べている。「日本を攻める」計劃に、孫文が本氣だつたか否かは不明だが、少なくとも民國統一後の「國軍」の中核は、段の指揮下にある邊防軍（舊參戰軍）とする計劃であつたことをうかがわせる。孫文にとつてもまた、民國統一と國軍形成は表裏一體であり、かつ自身を政治的・軍事的に存立させるためにも、曹・吳打倒と並んで、あるいはそれ以上に、段祺瑞や張作霖に接近するうえでの大きな動機だつたのである。そして安直戦争での段祺瑞の敗北をさかいに、孫文の同盟対象は、張作霖へとより強くしぼられていくことになる。

遅くとも二〇年七月に、現遼寧省海城縣、張作霖と同郷出身の國民黨員・寧武に、張への接近工作を命じて以降、孫文は張との提携關係構築を進めた。二一年になつても張作霖を、「日本人の命令に従う反動君主派勢力の頭目」とみなし、「軍隊を私有して中華民國を攪亂する」者として打倒すべきだと公的には批判していたが、一方で張に對する認識の深化は、寧武らのもたらした情報によるものと考えられる。よつて次章では、寧武と張作霖との接觸から、いかにして孫文と張との極秘提携が生じたのかを検討する。

第三章 提携關係構築とその意義

孫文が寧武に張作霖との接觸を命じたのは、安直戦争前後の上海においてであつた。曹・吳と段との利害衝突を利用して段と結び、さらには張と結んで、段・張・孫文の三者が協力して、曹・吳を討つという構想である。⁽³³⁾

孫文から命令があつた夜、寧武は朱執信ら⁽³⁴⁾、上海で活動中の同志たちと會い、段との合作について聞かされた。彼らによると、この合作には多くの反對があつたが、「段祺瑞は袁世凱の帝政に反對した愛國の軍人である。彼とは聯合しても

よい」と孫文は述べたという。その後寧武は、「張作霖が華僑の投資により葫蘆島港を開発したがっている」との情報をつかみ、二〇年夏、「巡閱使會議」に出席する張（當時、東三省巡閱使）に面會すべく、天津に急行した。

天津では張景惠の紹介により、張作霖と面談することができた。張作霖は、「葫蘆島港建設によつて日本の大連港に對抗したい」と明言し、華僑の投資を歓迎した。寧武は、「政局不安定な現状では投資が得られない」と答え、「段祺瑞と孫文とが協力して曹錕・吳佩孚を倒そうとしている」という話をあえてして、張の反應を見た。張は、その話自體は知っているとしたうえで、なぜ孫文が段と組む氣になったのかを逆に寧武に尋ねた。寧武は、「どのような人でも革命に賛成しさえすれば、孫先生は協力する」と答えた。張は、少將で副官の張亞東を寧武に同道させて、孫文との會見を希望した。

孫文は張亞東に會い、張作霖を高く評價したうえで、簡単な書簡を張亞東に持ち歸らせた。二〇年秋に、寧武が北京で張作霖に再會した時には、張は孫文に認められた喜びを率直に語つたという。しかしこの日、曹錕も張を訪ねてきた。曹は、日本の國民黨員が寧武に出した二通の書簡を持っており、そこに奉天軍總司令部祕書長の名があつたため、張と孫文との關係をただしに來たのであつた。張は、「寧武との聯絡は祕書長の一存」とし、その場で張景惠に電話して叱責し、祕書長の處分を命じた。寧武は、「北京憲兵司令らが自分たちを常に監視し、日本の郵便局から自分たちの書簡を盗ませている」と張に訴えた。張は激怒するとともに、「以後のやりとりは慎重に」と忠告し、次回は奉天に來るようにと誘つた。ただし、二一年には兩者間に表立つた動きはない。

二二年二月、奉天に到着した寧武は、まず張學良や楊宇霆と會談し、そのあと張作霖と會つた。張は旅長・李少白を孫文のもとに派遣したいと希望したため、寧武は李を連れて、桂林大本營で孫文に李をひきあわせた。孫文は葫蘆島開發計劃に理解を示したので、李は五體投地して敬服した。寧武が孫文に、「張作霖は『革命』の二文字にこそ言及しませんでしたが、先生を尊敬し、先生が救國の方法をご存じだと信じているので合作には成功が望めます」と報告すると、孫文は上海にいた伍朝樞に張作霖への答禮を命じ、寧武には、曹・吳打倒聯合構想を提案した張宛の書簡を持たせた。

孫文の書簡には、「今回曹・吳を討つことは、我々からしかけたものである。我々は失敗してもまたやり直せばいいのだが、兩公〔張作霖の字・雨亭による〕は一生の事業を臺無しにしてはいけない」と書いてあったので、張は感動して、「自分も出兵して山海關を出る」と明言し、その旨を孫文に報告するよう、寧武に依頼した。

二二年の第一次奉直戦争に敗北した後も、張作霖の孫文への信頼は揺らがなかった。勝敗は「兵家の常事」であるからしかたがないと述べた後、「孫先生は文人だから、軍隊の指揮をとるのは難しいだろう。自分はその方から他のことは求めない。ただ救國の大計だけを考えてほしい」と語ったという。

孫文が上海に到着すると、張は寧武に、奉天訪問を孫文に要請してほしいと依頼した。孫文は婉曲に断つたが、軍資金の融通を張に依頼するよう、寧武に命じた。寧武が張に、孫文の経済的苦境を語ったところ、「患難の中でも朋友と交わる、という。自分は孫先生に十萬元を贈るから、生活の足しにしてみたい」と述べ、また廣東の陳炯明の反亂を鎮壓する件について、孫文側からの代表派遣を求めた。張は、韓麟春が浙江督軍・盧永祥と聯絡をとるついでに、孫文に贈る十萬元をもたせた。⁽⁴²⁾

寧武は、孫文が汪兆銘（精衛）・路孝忱⁽⁴³⁾を代表として奉天に派遣する旨を、張作霖に傳えた。張は感激して、「汪精衛は自分も長いあいだ尊敬してきた。自分があの方々を丁重に招いて、孫先生の代表を重視しているところを示せば、日本側に見せつけられる。この手配は君〔寧武〕がやってくれ」と命じた。

汪・路が來奉すると張は盛大にもてなし、何度かの協議を経て、孫文麾下の粵軍が廣東へ歸るための軍費・五十萬元の支援に同意した。許崇智の兄・許功武が奉天に派遣されてきて、その金を持ち歸った。以後、數十萬元以上の資金が孫文に贈られたが、寧武は正確な總額を覚えていないという。以上が、彼の回想録の要旨である。

寧武の證言を裏付ける史料はまず、二二年五月、第一次奉直戦争後に、孫文が張作霖宛に出そうとした書簡⁽⁴⁵⁾である。孫文は、廣東省近邊に展開する自軍の後方を固めるのに腐心したため、張作霖の入關に呼應して北伐できなかった不手際を

わび、敗れた張に、望みを失わずに反攻するよう勧めている。また當時、粵軍第七獨立旅旅長であった吳忠信⁽⁴⁶⁾を、「軍事全權代表として特派」するので、彼と相談してほしいと依頼している。回想録にある、奉直戦争前に寧武が持参したという書簡について筆者は未見だが、孫文が張作霖と結んで軍事行動をとろうとした點は共通している。

また同月二九日附の歐米記者のインタビュー⁽⁴⁷⁾に對して、孫文は段祺瑞や張作霖との「妥協」⁽⁴⁸⁾を隠してもいない。「張作霖との約定により、廣東『政府』がまず北伐して、吳佩孚の兵力を牽制するつもりですか」という記者の質問にも肯定の返答をし、「我々は互いに代表を派遣して意見を交換したので、我々が桂林に集結する計劃を彼『張作霖』は知っている」と打ち明けたほどである。この記事から、二二年五月を境に、孫文が張作霖との提携關係をあえて公開し、吳佩孚に壓力をかけ始めたことがわかる。また約三か月後には、吳や曹錕とも民國再統一のための協議をしていると日本の新聞記者に明かし、段祺瑞も了承済みとした。⁽⁴⁹⁾

コミンテルンと吳佩孚との提携を考えて、吳佩孚と接觸したことのあるマーリンが、九月二六日附で残している記録⁽⁵⁰⁾によると孫文は、提携對象としては吳佩孚よりも張作霖を推薦し、高く評價している。曰く、「吳佩孚は中國の老學究 scholar⁽⁵¹⁾である。彼に新しい思想への興味を持たせるのは容易ではない。彼は『完成品』である。しかし土匪・張作霖は加工できる『原料』である。彼が單なる日本人の道具であると認識するのは正しくない。…(中略)…彼は無教養だが、聰明な人ではある」。「軍閥」中では知識人として評價の高かった吳佩孚よりも、「土匪」(馬賊)出身の張作霖のほうが、「新しい思想への興味」を持たせやすい、彼にはそういう柔軟性があるというのは、張作霖と交渉して孫文が得た實感であらう。

以上のように孫文は、北京政界やコミンテルンに積極的に働きかけ続けたので、中國内外の利害關係者たちは、次第に彼を無視できなくなっていく。彼は中國政治の現状を批判しているだけの存在ではなく、關係者たちが取り込むべき、政治的最重要人物へと浮上していったのである。

二二年九月二日、歸郷中の蔣介石に、上海に来るよう要請した書簡⁽⁵¹⁾の中では、「近日中に「廖」仲愷・「胡」漢民・「汪」精衛をそれぞれ日本・奉天・天津などへ派遣して活動させるつもりだ」と打ち明けている。二二日附で張作霖に出した書簡では、韓麟春のほか、段祺瑞の義弟である吳光新も孫文と協議して、彼らが傳える張作霖の方略と孫文のそれとが一致していること、段・張・孫文の提携關係に盧永祥も加える旨を、張も同意していることがわかる⁽⁵³⁾。また第一次奉直戦争で張の敗北により再考した作戦、すなわち西南で孫文が擧兵し、これに聯動して張が北京・天津・保定を獲得し曹・吳の退路を斷つ計劃や、粵軍の具體的な展開状態、軍費不足と援助要請などが詳述されている。同日附の張學良宛書簡でも、張作霖宛と同様、粵軍との共同作戦をもちかけ、韓麟春から聞いたという東三省の「整軍經武・養銳待發」策に、贊同の意を表している⁽⁵⁴⁾。なお同日附の寧武宛書簡とあわせ、三通全てに「汪兆銘を自分の代理として派遣する」旨が記されている。このころ、雙方の代理が活發に往來し、張作霖との意見のすり合わせを、孫文が急速に進めたことがわかる。

一月、寧武の同志である楊大實⁽⁵⁵⁾に宛てた書簡では、當時孫文のもとで段・張・孫文の聯携を劃策していた徐樹錚⁽⁵⁷⁾にまつわる悪い風聞を、張が氣にかけないか心配している。また奉天省長・王永江⁽⁵⁸⁾が、孫文支持者である實業家・佟兆元⁽⁵⁹⁾の助けを得て、行政に熱心であることを高く評價し、王と懇意になるよう楊に勧めている。楊は東三省における國民黨の宣傳工作を擔當しており、現地の風聞や張政權の内情を孫文に傳えていた。よって孫文は、張作霖との良好な關係を壊さないよう腐心するとともに、張政權の重鎮である王永江を取り込んで、萬が一、張との關係が悪化しても、とりなしを依頼できる人脈を形成しようとしたのである。つまり張作霖と王永江との互角の關係を、孫文が正確に把握していたことがうかがえる。

孫文がここまで張作霖との關係強化に盡力したのは、むしろ中國政治の中樞部に足がかりを得たいからではあったが、同時に進行していたコミンテルンやソ聯との協力關係構築において、相手に一方的な主導權を握られないためのカードとして使えるからでもあった。先述したように、孫文は一九二二年當時の張作霖を、單なる日本の道具とは見ていなかった

が、背後にある日本の影響力もろとも、ソ聯を恐れさせる手段にしていたのである。

一月二日、孫文はヨッフエに對して、ソ聯軍の滿洲進攻を牽制したが、「もし張作霖が私の話を聞き入れなかつたら、ソ聯は北方で軍を集結させて張作霖を感化してもよい」と述べた。ヨッフエは孫文の意見に同意し、チチェリン宛の書簡中で、「もしソヴィエト・ロシア軍が滿洲に進入したら、日本はその侵略に反對する姿勢をとり、白系ロシアの中心勢力を動員して、ソヴィエト・ロシアに反對する戦争を再び發動するだろう」と述べ、また「いかなる状況下でも、張作霖を消滅させることを孫文は許さないだろう」とも報告しているという。一二月六日には、孫文はレーニンに對しても、「あなたが北滿を占領しようとするのは、張作霖に對する不信心のためだと私は確信しています。しかし：（中略）：私と共に歩調をとれば、張作霖「の行動」を理性的な範圍内にとどめることができ、ソヴィエト・ロシアの安全を保障するのに必要な、全てが行えるでしょう」と述べている。⁽⁶¹⁾

本稿では、孫文と張作霖との關係構築に的をしぼって検討した。しかしこの關係に限っただけでも、孫文の對「軍閥」工作が、中國政治の中樞部に到達しかつそこで長く生き残るための、複雑かつ眞摯なものであったこと、またソ聯やコミンテルンの出方をにらんだ、戦略的なものであったことが判明した。なお對「軍閥」工作でいえば、張作霖ともいわずゆる「反直（隸派）三角同盟」を形成した段祺瑞・盧永祥も重要ではあった。しかし段は、安直戦争後は軍事的實力を失い、孫文にとつて、有力者間の利害調整役としての利用價值しかなく、またその國務擔當經驗を評價していたにすぎず、張作霖に比べて、同盟相手としては副次的な存在であったと思われる。その段に代わつて段派を事實上リードした盧永祥は、張作霖との關係は常に重視していたが、「和平」發出後、張と孫文との意見が對立しそうだった時にもその調停を行わなかつたほど、孫文との關係には冷淡であった。⁽⁶²⁾孫文が、同盟維持に必要な協議・聯絡以上の關係を、彼との間で持とうとした形跡は、現在のところ筆者には見いだせないでいる。

しかし少なくとも、従來は完全な敵對者であった張作霖の後ろ盾を得る感觸をつかんでから、滿を持して「和平」を發

出したのである。段・盧・曹・吳、またそのほかの國內諸軍事勢力との交渉をも重ねていけば、孫文本人が述べるように、相互の領域不侵犯を守りつつ、彼らの兵力を等しく削減して、民國の平和統一を實現するのは、彼にとってあながち空理空論でもなかったのである。⁽⁶³⁾ 權謀術數も辭さず、中國政治の中核者たらんとした孫文の自負と昂揚感が、ここにはあらわれている。

おわりに

孫文が張作霖の軍事的實力を理解したのは、一九一八年二月における張の「南征」以降であった。それまで共和制の破壊者として漠然と嫌悪していた相手が、自分のテリトリーに侵入しようとしている存在へと急浮上したからである。よって當初兩者には、交渉相手としての接點すらありえなかった。しかし第一次世界大戦後における民國政府統一の必要性が、まず孫文の、全國政權獲得への意欲を高めた。その一方で、廣州政府内での權力闘争に敗れた結果、孫文は、再起して政敵からの壓迫を退け、なおかつ自身の存在意義をかけて、その後の中國政治のなかで生き残るための軍事力を、獲得する必要にも迫られた。確固たる軍事基盤を持たなかった孫文にとって、敵對者であった張作霖との接點を探ることは、當時國內最大級の軍事力をもつ彼から、援助を引き出せる可能性を考えれば、實行をためらってはられない政略・軍略であった。また張作霖との提携は孫文にとって、單なる當局批判者から脱して政治當事者になっていくうえでも、大きな方針轉換であったといえよう。

張作霖は、日本に育成された「軍閥」として、このころも孫文の嫌悪の対象ではあった。しかし安直戦争以降、北京政府を實效支配するようになった直隸派に伍していくためには、その同盟者でありつつも、同派に對抗しうる張を、切り崩してとりこむ策が最も現實的だったのである。

長らく敵對・嫌悪していた相手に、軍事的あるいは政治的必要性から接觸するにはいくつかのチャネルがありえたが、

そのなかで結果的に突破口を開いたのは、同郷のつながりを利用した人脈であった。

孫文は、張作霖と同郷の寧武に工作を命じた。寧武は辛亥革命當時、張作霖の部下に同志・張榕を殺害された経験を持つが、過去を警戒されずに張作霖に接近するのに成功した。「革命賛同者であれば、孫文は誰でも提携する」と寧武から聞いた張は、副官を寧武に同道させて孫文との交渉を開始し、孫文が張を認めると、寧武への信頼も深めた。二二年には、孫文と張作霖は、曹錕・吳佩孚を討つ共同軍事作戦を計劃するに至る。第一次奉直戦争では成功しなかったが、計劃そのものは繼續し、張作霖から孫文への軍事費支援も複数回おこなわれた。また往來する代理人も次第に要職者となり、張作霖は總參謀である楊宇霆の腹心・韓麟春を、孫文は最も信頼する側近の汪兆銘を、最終的にはたてるほどになる。また孫文は、寧武とは別に、同じく東北出身の楊大實を通じての情報収集や宣傳工作も行っており、このルートから奉天省長・王永江への接近を圖らせようとするほど、張作霖政權内部に食い込もうともしていた。

このような張作霖との提携關係は、軍事的實力者からも支持を受ける存在として、北京政界における孫文のステイタスをさらに上げた。その自信と張への根回しに手ごたえがあったからこそ、二三年の「和平」は、孫文にとって決して畫餅ではなく、翌年の第二次奉直戦争での張作霖勝利をうけて、國民會議開催をよびかける布石にもなりえたのである。

註

- (1) この名稱自體がすでに、敵對者からのレッテルである（意味の變遷については、澁谷由里『〈軍〉の中國史』講談社現代新書、二〇一七年、一四四―一五一頁を参照のこと）。日本での用例に影響され、政治に介入する專横的な有力軍人およびその派閥を「軍閥」と定義し、「國法を破壊する」存在として最初に批判したのは陳獨秀であった。
- (2) 劉壽林ほか編『民國職官年表』（中華書局、一九九五年）、一二八頁。顧維鈞の略歴は、徐友春主編『民國人物大辭典』（河北人民出版社、一九九一年）を参照。
- 當時のペンネームである「只眼」名義で書かれた、「歐戰後東洋民族之覺悟及要求」（『每週評論』第二號、一八年二月二十九日）を参照。

- (3) 藤井昇三は、「帝國主義列強に對する妥協性、帝國主義の本質に對する認識の不徹底」から、「帝國主義列強と結合する國內軍閥に對する妥協的態度」が孫文に生じたと考察した(同『孫文の研究——とくに民族主義理論の發展を中心として——』勁草書房、一九六六年、一九六頁)。
- 波多野善大は、二四年における孫文の和平會議構想について、「軍閥を説得して軍隊を解散または削減させるといふ發想」は「はなはだあまい」(同『中國近代軍閥の研究』河出書房新社、一九七三年、三五七頁)、と斷じている。
- (4) 二二年に曹錕・吳佩孚を倒すために、孫文が段祺瑞・張作霖との提携を正當化した理由について横山宏章は、「(一)軍閥をもって軍閥を制すという革命戰略、(二)主要な敵を一つに絞り、それへの全力攻撃を集中するという軍事戰略」が背景にあつたので、孫文の敵對者である曹と吳に、「反對する勢力の性格を不問にする」といつた論理」を内包しえたと指摘している(同『孫中山の革命と政治指導』研文出版、一九八三年、六二～六三頁)。また水野明は、中國東北地方史の文脈において、あるいは蒋介石・張作霖の提携「密約」(二六年八月)の前提として、孫文と張との提携關係に若干ふれてはいる(『蒋介石の北伐と『張・蔣密約』の成立とその展開』水野『東北軍閥政權の研究——張作霖・張學良の對外抵抗と對內統一の軌跡——』國書刊行會、一九九四年、一九六～二三六頁)。近年では深町英夫が、『孫文——近代化の岐路——』(岩波新書、二〇一六年)において、孫文には一貫して中央集權
- と獨裁への志向があつたと指摘し、張作霖・段祺瑞・馮玉祥の招聘に應じた二四年の上京についても、「何らかの形で新政權に參與することを望んだのだろう」(二〇二頁)と述べている。
- (5) これについては、一九七五年に遼寧省北鎮縣で發見された、孫文の張作霖宛書簡の存在が明らかになつた(薛景平「新發見的孫中山致張作霖的信」『遼寧大學學報(哲學社會科學版)』一九八一年五期)ことがひとつの契機となつたようである。ただし薛の解讀結果については、のちに王暉が批判し、修正案を示している(『對首度公開『孫中山致張作霖信』(附照片)的研究』『遼寧大學學報(哲學社會科學版)』二〇〇三年六期)。
- (6) 「孫中山與奉系軍閥」(『近代史研究』一九八六年六期)。
- (7) 提携關係が形成されるまでのプロセスを、複数の段階に分けて考察している(一九二三年を中心とした、「論孫中山與張作霖之關係」『遼寧師範大學學報(社會科學版)』一九九六年五期、一九二四年を中心とした、「分岐與矛盾——孫中山與張作霖天津會談及其他」『東北史地』二〇一三年一期、一九二〇～二二年を中心とした、「孫中山對張作霖的認識及雙方的初期合作(一九二〇～一九二二)」『東北史地』二〇一六年二期)。
- (8) 「孫中山張作霖的關係與『孫文越飛宣言』」(『歷史研究』一九九七年二期)。この論稿以前に發表した段雲章との共著『孫中山與中國近代軍閥』(四川人民出版社、一九九〇年)でも、張作霖との關係を概説している。

- (9) 「孫中山和張作霖的聯合與決裂」(北京科技大學學報《人文社會科學版》一九九八年一期)。
- (10) 秦孝儀主編『國父全集』(以下、『國父』)第二冊(近代中國出版社、臺北、一九八九年)、一一四～一一六頁。邦譯は、林要三譯「平和統一通電」(伊地智善繼・山口一郎監修『孫文選集』第三卷、社會思想社、一九八九年、五七～六二頁)を参照。
- (11) 後述する東北出身者のルートだけではなく、北京政府の文官や、日本の陸軍士官學校留學・卒業者のルートも利用しており、各ルート内、あるいはルート相互の關係も含めると、人脈や情報網の全容は極めて複雑である。
- (12) 「致袁世凱盼轉飭趙爾巽釋放柳大年電」(民國元(一九一二年)二月一八日、『國父』第四冊、二二四頁)。この史料では逮捕日が不明であるが、胡玉海・黑蓉主編『奉系軍閥大事記』(遼寧民族出版社、二〇〇五年)によると、陽曆二月一日であるという。
- (13) 奉天における革命と張榕暗殺事件については、澁谷由里「馬賊の「滿洲」——張作霖と近代中國——」(講談社學術文庫、二〇一七年)、一〇八～一六頁を参照のこと。
- (14) ただし第二革命のあいだ、陳其美は東北に人を派遣して、張作霖らを説得して南方の蜂起に呼應させようとしたが成功しなかった。東北での基盤が弱いと革命全體も成功しないという反省として、のちのち彼のなかに残った経験であると劉貴福は指摘している。劉、前掲「孫中山對張作霖的認識及雙方的初期合作(一九二〇～一九二二)」、五一～五二頁。
- (15) 二頁。
- (16) 深町、前掲『孫文』、一四九～一五四頁。
- (17) 劉立勤・李濤『奉軍』(山西人民出版社、二〇〇六年)、九八～九九頁。
- (18) 深町、前掲『孫文』、一四九～一五四頁。
- (19) 「致陳炯明促速出兵入閩電」(民國七年二月一九日、『國父』第五冊、一九二〇頁。「」内は筆者の補筆(以下同じ)。
- (20) 「致唐繼堯告以援鄂援閩軍情竝主張討伐復辟黨電」(民國七年三月五日)、『國父』第五冊、三七頁。孫文は、「復辟黨人」と張作霖とともに「魑魅」と表現している。
- (21) 「復旅滬公民調和會責以公民調和之謬誤電」(民國七年三月三日)、『國父』第五冊、五二頁。
- (22) 習、前掲「孫中山與奉系軍閥」、七四～八一頁。
- (23) 深町、前掲『孫文』、一六四頁。
- (24) 韓信夫・姜克夫主編『中華民國史大事記』第二卷(一九一六～二二)、中華書局、二〇一二年。
- (25) 一段は以後、國務總理に復歸しなかった。澁谷、前掲『軍』の中國史、一六五～一六六頁。
- (26) 「致田中義一勸改變日本對華錯誤政策函」、『國父』第五冊、二二二頁。
- (27) 「四總裁宣言與日本對中國之策略」(民國九年七月)、『國父』第二冊、五三二頁。
- (28) 韓・姜、前掲『中華民國史大事記』第二卷。
- (29) 「解決中國問題之方法」、『國父』第三冊、二二四頁。

- (29) 本人は一九年秋としている（寧武「孫中山與張作霖聯合反直紀要」中國人民政治協商會議全國文史資料研究委員會編『文史資料選輯』第四一輯、文史資料出版社、一九六三年、一一五頁）。なお段・邱、前掲「孫中山與中國近代軍閥」四〇六頁の欄外注③は、これを彼の誤記とするが、代案は明記していない。寧武が張作霖に最初に會つたのが二〇年の「巡閱使會議」（韓・姜、前掲『中華民國史大事記』第二卷によれば七月八日）開催時であることから、それ以前に孫文の命令を受けていなければ、接觸は不可能である。
- (30) 一八八五〜一九七五 本名は良言。奉天の醫學生であった時に孫文に書簡を送り、知遇を得た。一九〇八年、中國同盟會遼東支部に加入。一年、遼東の鳳城蜂起などを指導。二四年、奉天省代表として中國國民黨第一次全國代表大會に出席。王鴻賓ほか主編『東北人物大辭典』第二卷上、遼寧古籍出版社、一九九六年を参照。
- (31) 「建立一個由優秀知識份子組成的政府是我們近期的任務（譯文）」（民國一〇年四月）、『國父』第二冊、五四二頁。
- (32) 「軍人應貫徹主義爲國犧牲」（民國一〇年四月二三日）、『國父』第三冊、二四五頁。
- (33) この構想を最も早く提案したのは、北京政府の農商總長や參議院議長を務めた李盛鐸であり、彼は甥の李守冰を一九二〇年に孫文のもとに派遣して、吳佩孚を討つ挾撃策を検討させたという。王、前出「孫中山和張作霖的聯合與決裂」、五八頁。
- (34) 一八八五〜一九二〇 本名は大符。一九〇六年、日本留學中に中國同盟會に加入。一九年、上海で『民國日報』副刊の『星期評論』と「建設」雜誌を創刊。二〇年九月、廣州に赴き、孫文に従わない廣西軍の歸順を策動したが、同軍によつて殺された（徐友春、前掲『民國人物大辭典』。以下人物の略歴は、特に斷らない限りこの辭典による）。
- (35) 一八七二〜一九五九 安直戰爭での直隸派の勝利に貢獻し、當時は察哈爾都統。王ほか、前掲『東北人物大辭典』第二卷上、澁谷由里「張景惠と張紹紀」「漢奸」と英雄の滿洲」（以下『漢奸』と略）、講談社選書メチエ、二〇〇八年、四八〜八四頁。
- (36) 一八八六〜一九二九 日本の陸軍士官學校第八期卒。革命前に歸國し、民國ではほぼ一貫して張の總參謀を務めた。『東北人物大辭典』編委會編『東北人物大辭典』遼寧人民出版社・遼寧教育出版社、一九九一年。澁谷、前掲『漢奸』、二八〜二九、三八〜四〇頁。
- (37) 李夢庚とも。生没年不明。中國史學會ほか、前掲『北洋軍閥』第四卷、八一六頁の「孫文復李夢庚函」（一九二三年二月一日）の注には、「張作霖の腹心」とある。なお劉、前掲「孫中山對張作霖的認識及雙方的初期合作（一九二〇〜一九二二）」、五三頁によると、奉天省議會副議長を務め、一九二二年二月には吉林第四混成旅旅長であったという。
- (38) 二一年二月四日、孫文が「陸海軍大元帥」として、全國統一（北伐）のために設營。
- (39) 一八八七〜一九三四 清末民初の官僚・政治家である伍廷芳の子。一九年、廣州政府代表としてヴェルサイユ講和會議に出席。二二年、孫文が非常大總統となると外交部次

長に就任。

- (40) 一八八八～一九三〇日本の陸軍士官學校卒。二二年一月、陸軍部次長。七月、東三省兵工廠督辦。楊宇霆の腹心。
- (41) 一八六二～一九三三 北洋武備學堂卒業後、北洋軍の將校を経て、民國では段派に屬した。二〇年に浙江督軍。二二年、自ら廢督を宣言し、浙江省の軍官から推擧されて浙江軍務善後督辦に就任。
- (42) そのうちの八萬元は韓が流用してしまった。發覺したのは、孫文の寧武宛禮狀に、「兩公が贈ってくれた二萬元を受け取った」とあったためで、それを讀んだ楊宇霆は韓を叱責し、孫文に改めて送金したという。なおこの禮狀は現存する〔孫中山復寧武函〕一九二二年九月二二日、中國史學會ほか、前掲『北洋軍閥』第四卷、八〇九頁。回想録が「三萬元」とした金額が、実際には「二萬元」であったことが判明したため訂正した。
- (43) 一八八一～一九三二 日本の陸軍士官學校第八期卒（楊宇霆と同期）。一九二二年、廣東非常大總統府參軍。
- (44) 一八八七～一九六五 日本の陸軍士官學校に留學。一九二〇五年、中國同盟會に加入。一七年に大元帥府參軍長。二二年、粵軍第二軍長。
- (45) 「致張作霖派吳忠信接洽軍事函」、「國父」第五冊、三三四頁。原件（中國國民黨黨史會藏）には日附がない。當時孫文は、吳忠信を張作霖・段祺瑞雙方に派遣する豫定だったが、吳佩孚が黎元洪を大總統に擁立するなど、北京政局に大きな變動があつたうえ、陳炯明の反亂もあり、結局派遣できなかつた。そのためこの書簡も出されなかつたとい
- う。「吳忠信跋」、中國史學會ほか、前掲『北洋軍閥』第四卷、八〇七頁。
- (46) 一八八四～一九五九 陸軍の隊長であつた時に中國同盟會に加入。一七～一八年、護法戰爭に従事。一九九年、粵軍第二軍總指揮。二二年、同第七獨立旅旅長兼廣州大本營憲兵司令。
- (47) 「北伐之攻略」、「國父」第二冊、五五一～五五二頁。
- (48) 「北方との同盟か」という質問にはその旨を否定している。また孫文は、「この妥協が可能なのは、服従を基礎とするからだ。彼らは命令に必ず服従しなければならぬ」とも語っており、北京政府を對等な相手とは考えていないと強調している。
- (49) 「北方軍人應有國家統一之誠意」（民國一二年八月二九日）、「國父」第二冊、五六二～五六四頁。インタビュアーは大阪毎日新聞上海駐在特派員・村田孜郎。
- (50) 「馬林爲格克爾同孫中山的談話所做的記錄」一九二二年九月二六日（上海）中共中央黨史研究室第一研究部譯『聯共（布）、共產國際與中國國民革命運動（一九二〇～一九二五）』（北京圖書館出版社、一九九七年）、第一卷、一三五～一三六頁。劉、前掲「孫中山對張作霖的認識及雙方的初期合作（一九二〇～一九二二）」、五二頁。
- (51) 「致蔣中正促來滬籌商軍事函」、「國父」第五冊、三四八頁。
- (52) 一八八一～一九三九 一九〇四年、日本の陸軍士官學校卒。二〇年六月、安直戰爭で直隸軍に捕われたが、二一年に釋放された。
- (53) 「復張作霖請出兵北京竝派汪兆銘面洽書」、「國父」第五

冊、三五〇頁。

- (54) 「復張學良派汪兆銘就商討伐曹吳函」、「國父」第五冊、三五〇～三五二頁。

- (55) 前掲「孫中山復寧武函」。

- (56) 一八八四～？ 日本の東斌學校に學び、卒業・歸國後、郷鎮警察を創設。革命時には張榕と共に聯合急進會を組織。一三年に衆議院議員となったが、國會解散後、奉天で東三省護國軍を組織。なお王ほか、前掲『東北人物大辭典』第二卷上によると、二二年、廣州「大元帥府大本營」諮議兼財政部參議。

- (57) 一八八〇～一九二五 一九〇七年、日本の陸軍士官學校卒。段祺瑞の側近。一八年初頭、張作霖に投じ、自ら奉軍副司令に就任するも、九月に張により解職された。段軍に復歸し安直戰爭で總參謀長となったが、敗北して上海に去る。二二年一月、桂林で孫文と會見し、段・張との同盟を劃策。

- (58) 一八七二～一九二七 清末の奉天省における警察行政で頭角を現し、一六年、張作霖権發足時の警察行政改革、および財政再建にも成功し、張の信任を得た。第一次奉直

戰爭敗北後は民政全般で張を支え、地方行政の確立・安定に努めたが、張の北京進出には一貫して反對した。澁谷、前掲『漢奸』、八六～一〇五頁。

- (59) 一八八四～一九四八 滿洲族。一九〇七年、奉天師範學堂卒。一二年、奉天省第一期省議會議長。一四年、孫文の「實業救國」思想に共鳴して奉天紡紗廠を創立。

- (60) 邱、前掲「孫中山張作霖的關係與『孫文越飛宣言』」、七二～七三頁。邱はこの史料を（ドイツ）郭恒鈺・（ロシア）季塔連科主編『聯共（布）、共產國際與中國・文件集』第一卷、モスクワ、一九九四年、九八頁より引用しているが、筆者は原件未見。

- (61) 「孫逸仙給列寧的信」一九二二年二月六日（上海）中共中央黨史研究室第一研究部譯、前掲『聯共（布）、共產國際與中國國民革命運動（一九二〇～二五）』第一卷、一六四頁。劉、前掲「孫中山對張作霖的認識及雙方的初期合作（一九二〇～一九二二）」、五二頁。

- (62) 習、前掲「孫中山與奉系軍閥」、八四～八五頁。

- (63) 『國父』第二冊、一一五頁。

【附記】 本稿、および二〇一七年度東洋史研究會報告「馮玉祥と張作霖——『孫文大總統』擁立構想をめぐる——」

（要旨は『東洋史研究』第七六卷第三號（二〇一七年二月）の「大會抄録」、一二二～一二三頁）は、科學研究費・新學術領域研究（研究領域提案型）「和解學の創成」のうち、「和解に向けた歴史家共同ネットワークの檢證」（課題番號 17H06337）の成果の一部である。

1872 and view it as a process involving mainly Japan, the Ryukyus, and China, I argue that the *Ryukyu shobun* should be investigated within a larger timeframe and from a global perspective.

**SUN WEN AND ZHANG ZUOLIN,
FOCUSING ON THEIR PARTNERSHIP
FOR THE REUNIFICATION OF THE REPUBLIC OF CHINA**

SHIBUTANI Yuri

Sun Wen's reconciliation with the Beijing government in the 1920s has often been regarded as an aberration for Sun as a revolutionary. The author, however, considers it a practical policy aimed at reunifying the Republic of China. This article attempts to clarify what impelled Beijing and Sun to collaborate, and to review how they evaluated one another and what they expected from the reconciliation. Emphasizing Sun's partnership with Zhang Zuolin, who reigned supreme in Beijing after 1924, I concentrate on the relation-building process between the two.

Section 1 covers the period from 1911 to 1918 when there was no room for cooperation. During this period, Sun regarded Zhang as an enemy of the revolution and the republic. However, Sun gradually discovered that Zhang would be useful in influencing the rivalries in Beijing among Duan Qirui, Cao Kun, and Wu Peifu.

Section 2 addresses the international necessity for reunification of the Republic due to the end of World War I in 1918, and the changes involving the Beijing Government and Sun. In this period, Duan and Sun sought to collaborate. However, Zhang sided with Cao and Wu and won the backing of Japan, becoming the most powerful military leader Sun could find. After Duan lost Anhui-Zhili War in 1920, Sun was threatened by Cao and Wu, and seeking a military partnership, entered into secret negotiation with Zhang.

Analyzing the memoir of Ning Wu, who was in charge of the negotiations and Sun's correspondences from 1922-23, I examine the relationship-building process in section 3. Sun planned joint operations with Zhang in the First Fengtian-Zhili War in 1922 but failed due to poor timing, and Zhang lost the war. However, Sun maintained the plan, built up a network of connections, and secured loans for the military from Zhang.

In conclusion, Sun decided to take a conciliatory attitude toward Duan and Zhang based on the necessity of reunifying the Republic. After Duan's loss in the

civil war of 1920, Sun regarded Zhang, who had greater military power, as the most significant partner. Securing war funding from Zhang provided Sun the opportunity to exercise influence on the military and political situation in the north.

THE INTERNATIONAL RESPONSE TO CHIANG KAI-SHEK'S *CHINA'S DESTINY*

MORIKAWA Hiroki

China's Destiny, published in March 1943, was regarded as an important work in China because the author, Chiang Kai-shek, as a national leader had a significant presence in the world. The contents and importance of the book were also widely touted. However, there were quite a few people in China who criticized Chiang, pointing out the “feudal” and “despotic” character of the book. Some went as far as deriding the book as the “*Mein Kampf* of China”.

Whether positive or negative, *China's Destiny* created a sensation as a work by the leader of China. Scholars have focused on the sensation it caused and have revealed many of the details of its domestic reception such as how the Chinese people, and particularly those associated with Kuomintang, responded to the book.

However, few studies have given sufficient attention to the international response elicited by *China's Destiny*. The book also created a sensation outside China, therefore, it is necessary as well to analyze international response to understand the comprehensive influence of the book. This article sheds light on the response of two important allies of China in 1943, the United Kingdom and the United States, and how two English-language versions of *China's Destiny*, published in 1947, were evaluated in the English-speaking world.

Authorities in both the UK and US expressed dissatisfaction with the contents of *China's Destiny*, because it attributed all the problems of China to the so-called unequal treaties. Because of this, the plan to publish an English version of the book met with a setback. After the end of the war with Japan, the American businessman Philip Jaffe published the English version of *China's Destiny* with detailed comments critical of Chiang's political stance. Jaffe had not secured permission from the KMT to publish, and thus the KMT vigorously criticized him and published an authorized edition of *China's Destiny* to counter Jaffe's edition. However, this KMT countermeasure allowed readers in the English-speaking world to clearly recognize the anti-American and anti-British character of the book, resulting in a severe blow to Chiang's reputation internationally.